

科学技術を生かした防災・減災政策の国際的展開に関する検討委員会（第24期・第7回）

議事録（案）

1. 日時 令和2年1月29日(金)10:00-12:05

2. 会場 日本学術会議 6-C(1, 2)会議

3. 出席者 21名（敬称略、名簿順）

小池俊雄、春山成子、川崎昭如、小松利光、小森大輔、寶馨、塚原健一、花木啓祐、緑川光正、望月常好、山川充夫、和田章、小森大輔、西嶋一欽（オンライン）、天野雄介、小野裕一、田村圭子、西川智、西口尚宏、林春男、廣木謙三

陪席者 2名 池田鉄哉（ICHARM）、中島壮一（NIED）

4. 議題

（1）前回議事録確認

〈資料24-07-01 第6回議事録〉の説明

議事録の確認の際に、「前回の委員会にて、災い（hazard）に、人間の行動が重なると、被害（disaster）が起こることは、防災の専門家の常識である。2018年の台風で関西空港は冠水し、橋梁にタンカーが衝突した。2025年の万国博覧会はこの北に埋め立ての進む夢洲で行われる。このようなところに多くの人を集める万国博に進んでパビリオンや展示場を作ることに賛成できない。」の発言があったとの意見があった。

（2）国内外報告事項

（2）国際連携活動の報告

1) 2019年5月 グローバルプラットフォーム2019（ジュネーブ）

〈資料24-07-02-01a グローバルプラットフォーム2019 議事次第〉、〈資料24-07-02-01b グローバルプラットフォーム2019 議長サマリ〉、〈資料24-07-02-01c グローバルプラットフォーム2019 ステークホルダー宣言〉、〈資料24-07-02-01d グローバルプラットフォーム2019 科学-政策フォーラム〉の説明

2) 2019年10月 IRDR 報告

〈資料24-07-02-02a IRDR 科学員会21回報告〉、〈資料24-07-02-02b IRDR 科学員会22回議事次第〉、〈資料24-07-02-02c IRDR 科学員会_22回参加者〉の説明

- ・ 2020年10月に成都でIRDR Conference 2020を開催予定。
- ・ 22回SCはオンライン参加が多かったため、それぞれの経過報告で終わって、次期IRDR

に関する実質的な議論があまりできなかった。23回 SC はクアラルンプールで開催予定。

3) 2019年10月 日中分野別ハイレベル研究者交流会 2019（防災減災編）（中国）

〈資料 24-07-02-03 日中分野別ハイレベル研究者交流会 2019-2020〉の説明

- ・ これからの30年を視野に入れ、日中の研究者の交流を進めていきたい。
- ・ 個人ベースではなく、組織的対応が求められる。日本の防災関係のカウンターパート機関が、中国側から選ばれた。4月に中国の代表団が、日本の研究機関を視察する予定。今後、どのくらいの頻度で来るのかは未定。
- ・ JSTが日中関係の事務局を務め、NIEDが本交流の事務局を務める。学術会議の会場を使って、学術連携体との交流をするなど、学術会議とも連携をしていきたい。
 - 本委員会の会議との連携を模索したが、日本学術会議事務局より枠組みが異なるので無理との見解が示された。今後も協議を続けていきたい。

4) 2019年10月 ぼうさい国大公開シンポジウム「災害を科学と語り継ぎ未来を生きる～伊勢湾台風の記憶をよみがえらせ、南海トラフ地震津波に備える」(名古屋)

〈資料 24-07-02-04 ぼうさい国大シンポジウム学術会議報告〉の説明

- ・ 次回は2020/10/3-4に広島での開催。九州大学から開催支援の意向が示された。

5) 2019年11月 世界防災フォーラム 2019（仙台）

〈資料 24-07-02-05 世界防災フォーラム 2019 報告〉の説明

- ・ 次回は2021/11/19-22に仙台にて開催。

6) 防災学術連携体活動

〈資料24-07-02-06a 防災学術連携体〉、〈資料24-07-02-06b 防災学術連携体 台風19号報告会〉、〈資料24-07-02-06c 防災学術連携体_低頻度巨大災害報告〉、〈資料24-07-02-07 防災減災連携研究ハブ報告〉の説明

- ・ 防災学術連携体の活動は57学会と、日本学術会議が協力して推進している。この春から日本災害医学会が主担当学会となる。
- ・ 各学会からの支援金をもとに、多くの学会と人々の協力によりこの活動は続けられている。
- ・ 2011年から東日本大震災に関する連続シンポジウムを始め、2016年に防災学術連携体が発足してから、地震災害・豪雨災害などの緊急報告会、防災減災に関わる定例的なシンポジウム、防災推進国体への参加、府省庁との意見交換会など多彩な活動を行っている。
- ・ 防災・減災分野の学会・日本学術会議の活動のポータルサイトを目指してホームページを運営している。(https://janet-dr.com/index.html)
- ・ ここでは多くの情報をわかりやすく紹介しているが、各学会のホームページを紹介し、市

民から各学会への問い合わせができる仕組みも作っている。

東日本大震災が起これ、分野間の連携不足、交流不足を痛感して、この活動は始められた。それまでは、他分野の研究や進め方に、他の分野から意見を述べるのが難しい雰囲気があった。防災学術連携体の活動を通して、分野間にある垣根を外してさらに自由な議論をする必要がある。

7) 防災減災連携研究ハブ活動

〈資料 24-07-02-07 防災減災連携研究ハブ報告〉の説明

(3) 審議事項

1) 提言について

〈資料 24-07-04 提言 骨子 (案)〉の説明

- ・ 5月までに提言をまとめる必要がある。これまでの議論を踏まえて、2つのミッション（シンセシス、OSS）を達成するために何をすべきかを提言としてまとめたい。国際展開委員会として、国際にフォーカスする。
- ・ 年度内に、もう一度国際展開委員会を開催し、提言について審議し、5月前にもう一度開催し最終的な提言をまとめたい。

【意見出し】

- ・ 本提言はレジリエンスの向上に重点を置いている。ハザードが働いた場合の防災・減災の面が弱い気がする。途上国では、打撃を受けたときの痛みをいかに小さくするか。防災・減災な側面が大事。レジリエンスも大事だが、その前段階も大事では。
 - 防災に関する明確なレジリエンスの定義はまだ出来てない。発災前から Preparedness を高めることもレジリエンスに含めることもある。そこが明確になるように書き足す。
 - Society 5.0、総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）では、予測力、予防力、対応力の3つの力の積分值としてレジリエンスを使っている。Society 5.0 との親和性を考えるとそれを定義にするのも一案。
- ・ 途上国は違った枠組みで捉える必要がある。識字率が低い国では、防災・減災の前に学ぶことが多い。地域の人がかかっていない中、いろいろな環境変動が起きている。日本の災害とは違った次元で起きていることもあり、そのようなものをどう捉えるのか。
- ・ 気候変動の言葉が冒頭のみ。全体で言葉を協調した方が良い。
- ・ ここで議論する科学技術を、どう世界に展開すべきか。メッセージの宛先として、世界に伝えることを強調したほうが良い。
- ・ 科学技術に関して具体的なコンテンツが出ると良い。
- ・ 途上国で激しい都市化が続き、危険なところに人が集中しているなど危機感を煽り、だからこそ科学技術を結集し、その知を隅々まで行き渡らせるためにファシリテーターが必要である、ということを強調したほうが良い。

- ・ 提言4と提言5、自助・共助・公助の順番。どこに重点を置くか。国の発展段階や災害の状況によって、どこに重点を置くか異なる。こういう状況の国は公助に重点を置くべき、といった整理があるときめ細やかな提言になる。
- ・ ガバナンスをもっと強化すべき。防災のガバナンスを強化するために、科学技術の役割を強化する。防災のガバナンスの中に、科学技術の中核に据える仕組みが必要。
- ・ グローバルガバナンスは未熟。国際協力のプロトコルも災害ごとなので混乱する。グローバルガバナンスに対する科学技術の役割を明確にする。
- ・ 科学技術が人々を幸せにすることが前提であるが、社会が欲深くなるのを抑制するスタンスが必要。欲望と抑制。科学技術があれば何をやっても良いという風潮を変える必要がある。欲望に応じて科学者・技術者が頑張るすぎることは良いことではない。科学技術の進展に期待して、科学技術で災害を封じ込めるのは無理ではないか。
- ・ 提言には2つの方向性がある
 - 国際的な問題を網羅的に上げていく→報告。
 - 提案するのにふさわしいものであれば、提言をOSSに絞る
- ・ ファシリテーターは重要。実行する人がいないと難しい。特に途上国で顕著であり、技術者の育成もしないと、実行する力が出てこない。
- ・ 所得格差についても触れるほうが良い。そういった格差をどうやってなくしていくか。
 - 国内の堤防でも、都道府県と直轄堤防の間の格差が生まれてきている。
- ・ 気候変動や急速な都市化が起こっているので、防災減災を加速する必要がある、5つの提言が必要、という文章があると提言の位置づけが明らかになる。
- ・ 自助・公助・共助はイコールではない。
- ・ 縦割り行政が有機的につながる、法整備や科学技術などを織り込めると良い。
- ・ この提言により、世の中がどうなるか、ということを書いたほうが良い。
- ・ 防災と環境の連携シナリオをもう少し書く必要がある。
- ・ 図と文章の繋がりがもっと明確になると良い。
- ・ OSSはどのようなものなのか、という理解を持ってもらわないと読んでもらえない。ファシリテーターは、日本で言えば何人必要か？どんなポジションの人達なのか？ボランティアか？我々はファシリテーターになれるのか？具体的なイメージが必要。
 - 前回の当委員会の提言では、地方大学の役割を示した。地方大学に地方のファシリテーターに担っていただく。建設コンサルタントもファシリテーター。まだ具体的に構想できていないが、より具体的な記述にする。
- ・ 防災と環境の知の統合。時間軸の違い。全体の時間軸で考えると一緒だが、十分に記述されていないので、加筆する。
- ・ 提言の冒頭にて、持続可能な開発への驚異として貧困について強調しているので、具体的提言においても少し触れたほうが良い。

【今後の予定】

- ・ 本日の議論を踏まえて、2月中頃に提言のビュレット版をメールベースで共有し、メールベースで意見をいただく。それを踏まえて、3月に検討委員会を開いて原稿をまとめる。3月の検討委員会開催が難しければ、年度明けの早い段階で開催したい。

(4) その他

表 防災・減災政策の国際的展開に関連する国際会議（開催順）

#	会議名	期間	開催地	備考
1	第17回世界地震工学会議	2020/09/14-18	日本・仙台	日本政府観光局（JNTO）主催の「平成29年度国際会議誘致・開催貢献賞」で誘致の部で受賞
	関連 URL : http://www.jaee.gr.jp/wp-content/uploads/2016/12/bid_17WCEE_161116_20mb.pdf https://www.jnto.go.jp/jpn/news/press_releases/pdf/20180201_2.pdf			
2	ぼうさいこくたい2020	2020/10/03-04	日本・広島	
	http://bosai-kokutai.jp/			
3	IRDR Conference 2020	2020/10/03-04	中国・成都	
4	世界防災フォーラム (WBF) 2021	2021/11/19-22	日本・仙台	
	http://www.worldbosaiforum.com/			